

「学習障害（LD）」をご存知ですか？

「学習障害」の名を聞いたことのある人は多いと思いますが、その意味は誤解されがちです。「学習障害」とは「成績が悪いこと」や、「勉強嫌いなこと」ではなく、「本来持っている知的な能力に不釣り合いに、読み、書き、計算の基本的な学習が苦手なこと」です。世界保健機関（WHO）は、「学習障害」の名は誤解を招くので「限局性学習症」の名称を勧めていますが、この項ではそのまま「学習障害（以下LD）」とします。

LDは子どもの約5%とクラスに一人くらいで、有名な映画監督のステイブン・スピルバーグもLDです。読み書きと計算・推論の苦手さが半分ずつですが、代表的なのは「読み」の問題で、「普通に話せるのに読みが苦手」なのです。私たちが勉強や仕事で覚えることの多くは文字を読んで学びます。「読み」は全ての学習の基礎であり、「読み」が苦手だと他の科目も苦手になります。LD児は会話には不自由がないのにうまく読めないのが、ご家族や先生から「努力が足りない」、「頑張ればできる」などと言われます。ところが単純な努力だけでは読めるようにならず、「勉強してもできるようにならないシムダ」と自信を失いがちです。しかし、LDは生まれつきの特性なので努力だけでは改善されません。

では、LDの子どもにどう気付き、どう支援したらよいのでしょうか？LD診断のための読み・書き・算数の検査は2010年頃から整備が進んできており、学校や病院で知能検査と併せて行い判断します。注意欠陥多動性障害（ADHD）など集中の評価などを行うこともあります。その上で、検査結果を元に医師や学校・学童保育・塾の先生とご家族で苦手さに合わせた支援策を考えます。最近ではアプリやIT教材なども開発されてきています。

LDの子どもたちは生まれつきの特性のために学習が苦手なわけですが、理解と支援がないと本人は傷ついたままで自尊感情も育ちません。将来のために、必要な支援を行い、基礎学力を身につけ、少しずつ「できる」という達成感を感じて自信を持てることが大切です。当院でもLDが疑われるお子さんの基本的な評価やご家族へのアドバイスなどを始めています。お子様の学習面での心配がありましたらご相談ください。

【小児科診療部長 大木 康史】

